

釣山人夜話

中嶋溪風

やまべと鱒の仔

ある年の春のある日、私はある孵化場の下流でやまべの蚊鉤つりを楽しんでいた。

おやぢ!! やまべを釣るのはいいが鱒の仔を釣るなよ、やまべを釣るのなら川の上流へ行かねば釣れないよ、その辺は鱒の仔ばかりだから上流へ行きなよ!!

“……”

“ウルサイナッ ガミガミいうな”

“鱒の仔を釣るなといってるんだ”

“鱒の仔なんか釣っていない”

にらみつけたら、どこかえ行ってしまった。しばらく釣っていると4人の男がやって来た。

“釣り人さん、孵化場の下は鱒の仔がいるから、上流へ行ってお下さいや”

今度は一寸丁寧な言葉になった。

“うん、上へ行けというなら行ってもいいが、先の若僧の文句が気に食わねえ俺はなあ、日本国中どこへ行っても、魚釣りの先生で通る男なんだ。あんな若僧の指図はうけないよ。一応魚を釣ってオマンマを食べている男だから俺の生活を邪魔する奴は承知しないよ。俺にも自衛権はあるのだ。3人や5人川の中へ叩き込むくらいのは覚悟しているんだ。俺は鱒の仔は一尾も釣つちやあいない。お前たちこの中から鱒の仔を一尾でも探してみろ。鱒の仔であればみんな逃して

やるよ。魚は川に一杯いるのだもの、釣って悪いものは一尾も要らねえ”

差出したハウスカレーの罐の中をのぞきこんだ彼らは一言もしゃべらなかつた。まず釣った山女魚を活かしているのにビックリしたらしい。またゆきどけ前の川の入口で何十尾のやまべを釣っていた事実に驚異の眼を輝やかしていたのも事実だ。

水温は3度だった。

この若僧の指摘する鱒の仔というのは生後満半歳位の稚魚が一度海に出て3週間位海におり、一度生まれ故郷にかえってすぐまた海に行く、その上り下りの途中のものを指すのであるが、若者たちは魚の知識なんか何一つなかったようだ。この稚魚は急に海で大きくなって一人前になり10糎内外の魚体だがウロコがおちやすいのでマスの子とよんでいるが、やまべの仔もいれば鱒の仔もいるわけだ。しかしもうこの時は仔という言葉は妥当ではない。このやまべは降海溯上して降海後産卵期までその川の海の近くにいるわけで索餌に東奔西走するものもいるが大きな川だと相当海中遠くまで出るから潮流を利用して遠洋に出るものもいるが小さい川だとその川の近くにいるものが多いようだ。また海に行っても身体機能の関係で再遡上し滞川生活を続けたり、何度も降海降湖を繰り返すものもいるようだ。私の釣っていたのは生後

満1年半位の山女魚だから川の生活が永かったため、海で急速に大きくなったとはいえ、皮膚もしまりウロコもトレ難いやまべであったわけで生後満半年位のいわゆるマスの子はまだ川の中にいたり、あるいは海で生活をしているところであった。元来やまべも鱒も同種異体であるから区別することはできないのだが先方様が鱒の子とやまべを分けて考えているのだから態々空とほけて抗言したのである。別にこれとって悪意があったわけでないが、まあ売言葉に買言葉である。鱒とやまべについてはウガツタ論説が沢山ある。曰く鱒の卵にやまべが白仔をかけるとやまべができ、鱒の卵に鱒の白仔をかけると鱒になるというのだ。

“あなたはそれを実際やったことがありますか”と聞くと返事をする事ができない。

つまり想像と観察の中に一貫性がない。それじゃあ、私はそう思うといえはいいのであるが、そうは仰云らない。親切に教えてやると、2、3年経つとその教わったことがその人の自説になっていることが多い。しかし確固たる論拠がないから別なことから触れて行くとチンプンカンプンである。まあこのような部類の人が喧々轟々としているのが現況の大部分であるらしい。

元来やまべも鱒も川の魚である。〈初めにやまべ居りぬ〉というわけだ。やまべはその本能として、スイートホームを離れて塩類と、食糧と、活動を求めて湖あるいは海に遊行するが魚体が大きくなる条件のものは成熟産卵を復巢しない。ただし降海（湖）したものは必ず一度復巢して再降海（湖）する習性があるよう

だ。また降海（湖）しても遡上してすぐ再降海（湖）しないものもある。これはまたある期間経つと降下することもあり得るようだ。その条件は体内組成の変化であると観察している。特に震蕩圧に対する条件などが原因ではなかるうか。

鱒をとる海獣や水鳥は笑っている

川へ産卵のため遡上する鱒をとると人間が人間を罰するような法律がある。魚は産卵期にとるのが原則であるのにおかしな話だ。そうして保護した稚魚は海へ行くと大きくなると鱒になり溪流で資源保護に何の努力もしない漁師どもがわが物顔に鱒をとっている。家の前に流れている川の鱒を保護した人たちは一片のアイサツも来ない。このようにヤカマシクいつているのに、どうしたことか営林局が空中から毒薬をマイタリ、ネズミ殺しの毒薬をマイタリ、農薬が流れこんだり、防腐剤が流れこんだりして、ゆきどけの時に幼魚が死んでも誰も文句をいう人がいない。工場汚水も同様である。鴨や水鳥、ウミネコ、ゴミ、アヒルなどが幼魚をとっても、これを殺しちヤイケネエーということになっている。トドなどの海獣がマスをとっても殺すことはできないらしい。マスを食べる海獣は数多くいるわけだ。北海道では鮭や鱒の子の稚魚を建網でとって煮乾にしている。どうも私にはわからないことばかりだ。他の生物がみたら笑っていることであろう。「馬鹿な人間どもよ」と私は提案する。もし鱒のために、また鱒を中心にして物を考えるならば、

- ①幼魚の保護の法律を徹底すること。
- ②鱒の子を食べる生物の掃滅。

- ③鱒は産卵期に川口もしくは川の中で取ることを原則とすること。
- ④その一部は国家の経費で採卵し保護すること。
- ⑤川の魚は川でとることを原則とすること、つまり未成熟の鱒を海でとらないこと、海の漁師は放って置いても川へ来る鱒をとる労力を他に転用するとよい。網1枚あればとれるのだ。

鱒の卵と産卵場と釣場

鱒の卵が川中の水の逆流を利用して流水方向と逆転してその流失を免れる事は大抵の(この方面の)学者は知っている。だが、かちかや鮎の卵や川虫の卵などまで言を及ぼしている人は解い。丁度ある学者が卵の形をした時計を卵と誤認して湯煮したと同じく、子供たちが梯形算や俵算を習っているのに1から100まで足せば幾つになるかと問われて一寸答をだせないのと同じである。これは心の盲点とでもいうものであろうか。人間万事このような事が多い。また、ある一つの観念の上に立って物を考えたり、見たりする場合にも白いものを赤いと見る場合もあり得る。人間ばかりかと思ったら魚もそんな年があるし、植物にもそんな年があり得る。

さて、川の水が上流の方に動くといったら、さては何かを企んでいるなど、このごろは子供たちがテレビやラジオの前で勤めるが、川の水は逆流する事がしばしばある。一つは渦の形で逆流し、一つは打ち当たった抵抗によって逆流するのだ。この逆流が河底で行なわれなければ魚の卵や川虫の卵はその生活環境途上に

おいて影響をうける率が多い。これから先はいわぬが花であろうが小さな雑誌の記事では書ききれない。

私はここで釣りの事だけ述べよう。私はこの逆流の起る河底を釣り場として選んでいる。魚の産卵場、つまり生れ故郷またはスキートホームである場合が多いし、同時にえさのよく集まる場所であるからである。特に春と秋、初冬と早春にはもっとも大切な釣り場であり、夏季は慧敏な大型山女魚や鱒がその冷水圏に潜むのである。

鱒年、鮎年、鮎年

新聞によく今年は鱒年だとか、鮎年、鮎年だなんていう事を書いている。何を根拠にして立論するのか詳記していない。3年説や4年説、あるいは他の推論を時々口から耳え伝わってくる事がある。

結論を急ごう、鮎に聞いたのか、鱒に聞いたのか、鮎にきいたのか、あるいは他の具体的な理由があるのか——答は？——ある新聞では、この問題で日本人とソ連人の答案が正反対であると書いていた。勿論北海道新聞なんてのはいい加減な事を書く新聞であるし、文句をつけても訂正しない新聞であるから、こんな傲慢無知な新聞に何が書かれていようが問題じゃあないが他の新聞にもそう書いてあるから間違いがないのであろう。金星とやりにロケットを飛ばす今日同じ人類の中にこのように見解の相違のあるのは如何した事であらう。おかしい話である。

私の観察を述べよう。

①魚の減少する原因が少なれば魚は

沢山古巢に戻ってくる。

②産卵魚の多少はある程度の事ならば大した影響をおよぼさない。勿論極端にいて1粒の卵に2尾の魚が生れるはずはないのだが……卵の数と摂理の比を比較した上の事である。

しからば如何なる原因で魚が少なくなるのであろうか。

④完全孵化の状件

⑤ゆきどけ水の状件

⑥寒魚の状件

⑦寒鳥獣の状件

⑧稚魚成育の状件

などが大きな原因である。

北洋に回遊する鱒鮭はその産卵場の状件と以上5項の状件を観察しなくてはならない。流水群の状件もこの5項の中に入る事は勿論である。これをやらないで

得た答案というものは100 俵の価値がない。併してこれを一々調査する事は至難な事である。他の状件を以て推理する事ははなはだ無謀な事である。

近くの川に産卵場を持つ沿岸の鮭、鱒、鮎はその年のゆきどけが大変関係する事を銘記すべきだ。鮭の場合は稚魚降海の年のゆきどけの状件がその鮭の産卵のための遡上数に圧倒的な関係があるし鱒は幼魚降海の時のゆきどけ状件の他にサクラマスの状件にある鱒は毎年のゆきどけと春夏秋冬の出水の状況が大きな状件となる。鮎は大部分1年魚であるからその年の春のゆきどけや出水の状件が圧倒的に関係してくる。勿論水質の幼魚に対する状件も同じことである。

池田勇人ぢゃないが私はウソをいわない男である。

創 生 の 河

荒 谷 七 生

私の日の懺悔を書き留めて
ななかまどの朱い実が
北方の冬を敲くとき
僕たちの白い内面にも
創生を信ずる暖かい
血潮の河が流れる。

河口は遠く海に注ぎ
だったん から ありゆうしやん から にほ
んかい から 寒流滞に 仮面無く 偽瞞なく
渴ける幻想からの逃走なく
憂愁湛えて ひたすら原始の河へ
故里へ種族の内秘にもだえて
遡江する 鮭たちの
想いにつながる。

風に揺られた夜の声
黄葉もみじを染めた河底の冷え
砂礫に秘そむ母乳を思慕する

この鮭たちの
ざわめきは混乱の群れてはない
この群れは悲痛の叫びでない
ぶなけ に色づいたもだえは
静脈に光る淫欲の鼓動でない
愛と目覚めと
聖なる遺産の氣息であった。

僕たちはこの脈膊を朝明けのように
享けつぐ 新しい一つの生命を創るため
深紅の鮭の卵よ 乳白色の生命の火よ
おそ秋の記憶にうすら陽を映つして
未来の幸福が萬物に遍照するように
お前の故里が美しい故に
僕たちの故郷がかなしい故に
僕たちの愛を信ずるために
北方のまぶしい冬のきびしさを超えて
鮭たちの 生命を吹き込むのだ。